私の名はイングリス・ユークス。前世は英雄王として世界を救った男だったのだが、女神様のサービスで、現世では美少女として生まれ変わっている。

【ラニ】「流石クリス！　よく似合ってる！」
【イングリス】「ありがとうラニ。」
ラニもすごく可愛いよ」

私は幼馴染のラフィニアと、この日のパーティー用のドレスを買いに来ていた。
彼女は私の事をクリスと呼び、私は彼女の事をラニと呼んでいる。
現世では、前世のような英雄王として国を守るなどというしがらみを捨て、
ラニと共に少女として人生を楽しみつつ、武を極めて行こうと考えている。
しかし、そんな私の思惑とは裏腹に、面倒な事に巻き込まれてしまうのだった。

王都からビルフォード公爵家――ラニの実家――への監察のため、使節団がやってきた時の話だ。
その使節団の中に、金の力で天上人となった、ラーアルという男がいたのだ。
私は幼少期にラーアルと剣の試合を行い、完全勝利した事がある。
ラーアルは、その時の試合で私に敗北した事を逆恨みしていたのだ。

そしてラーアルは天上人になった事をいい事に、私の関係者に対して無礼を働いた。
私はそれを咎めるべくラーアルに向かった所、ラーアルは私を夜伽の相手に指名したのだ。
丁度いい機会だ。私はラーアルを懲らしめようとその話に乗ったのだが、
私が想像していたほど、事態は簡単では無かったようだ。

【ラーアル】「よく来たなイングリス。たっぷり辱めて屈服させてやるからな？」
【イングリス】「私が大人しく慰み者になるとでも？　その腐った性根を叩き直して差し上げます！」
【ラーアル】「クックック…そう言うと思っていたよ。僕が何も考えず君を呼び出したとでも？」
そう言ってラーアルが取り出したのは、ビルフォード公爵家の不正に関する書類だった。
ビルフォード公爵は領民に優しいと評判で、そんな不正などをするような人達ではない。完全に捏造だ。
しかし、天上人であるラーアルがこれを国王へ提出すれば、ビルフォード公爵家は裁かれる事になるだろう。
そうなればビルフォード公爵家は勿論、ラニも領民もただでは済まない。

【ラーアル】「クックック…この書類は監察官にも渡してある。私が監察官を止めない限り、確実に国王へと手渡されるだろう」
【イングリス】「…くっ…卑怯な事を…」
【ラーアル】「ここで僕を殺した上で、監察官にそれは捏造だと訴えるかい？」
そんな事、出来るはずがない。
天上人を殺したとあれば、捏造されたビルフォード公爵家の不正以上の大問題になってしまう。
それに、監察官に書類が捏造だと訴えた所で、この国は天上人の言う事に逆らう事なんて出来ない。
きっとラーアルの思惑通り、ビルフォード公爵家は裁かれ、処分されてしまうだろう。

【ラーアル】「という事だ。ビルフォード公爵家を守るか、自分の貞操と誇りを守るか、選ばせてやるよ」
ラーアルからの下卑た視線が、私の胸や足に突き刺さる。
気持ちが悪い事この上ない。
私は武を極める事と同時に、幼馴染であるラニを絶対に守るという誓いを立てている。
ここで私が貞操と誇りを守ったとしても、ラニを守れなければ意味がない。
それに、私の貞操と誇りを蹂躙されたとしても、武を極める事に支障が出るわけでは無い。
ただ、こんな卑怯な男の慰み者になる事が悔しくおぞましいという、個人的な感情だけだ。
私一人が我慢すれば全て丸く解決するのだから、選択肢は二つしかなかった。

【イングリス】「…わかりました。ラーアル殿の夜伽の相手を勤めます。ですから書類の件は…」
【ラーアル】「クックック…それが人に物を頼む態度かい？下着を脱いで両足を広げながら、無様に土下座して頼むなら考えてやるよ」
【イングリス】「くっ…！！」
あまりの屈辱に、私は頭に血が上り、ラーアルをブチ殺しそうになるが、何とか我慢した。これからもっと屈辱的な事を経験する事になるのだ、これくらい我慢できなくてどうする。私は震える手で下着を脱ぎ捨て、その場で大きく両足を広げた状態で、床に手を付いた。

アングリス』『…お願いします、私を夜伽にお使いください…』
ラーアル』『クックック…いいだろう、使ってやるよ！』
ラーアルは私を見下ろし、鼻で笑った後、私の背後へと回り込んだ。
ラーアルは愉悦の笑みを浮かべ、私の股間と肛門を凝視する。
誰にも見せた事の無い局部を、こんな下種な男に見られるなんて。
私は屈辱で震える体を必死に押さえつけ、その辱めに耐える。

【ラーアル】「へぇ、大人っぽい見た目の癖に、君の割れ目には毛が生えていないんだな？　剃っているのか？」
【イングリス】「い、いえ…生えていないだけですっ…」
私は屈辱と羞恥で震えながら、ラーアルの質問へと答える。
そんな私の感情は表情に現れ、無意識にラーアルを睨みつけてしまう。
ラーアルはそれが愉快なのか、さらに私に屈辱を与える命令を下した。

【ラーアル】「それでは僕に見せつけながらオナニーをしたまえ」
【イングリス】「なっ……!?」
【ラーアル】「ちゃんと濡らしておかないと、入れた時に僕が痛いだろ？
それともこの僕に愛撫をして欲しいのかい？」
こんな男が見ている目の前で、この私がオナニーをするだなんて…。
それを想像するだけで、怒りと羞恥と屈辱で全身が震えてしまう。
しかし、こんな男に愛撫をねだる事だけは絶対に出来ない。
私は覚悟を決めて、震える右腕を割れ目へと伸ばして愛撫を始めた。

とはいえ、この体に生まれてからは、オナニーの経験などない。
元男だった私にとって、女の体でのオナニーなど見当もつかないのだ。
私は慣れない手つきで割れ目を愛撫してみた。
しかしこんな状況だ。私の体は発情せず、濡れる気配は無かった。

【ラーアル】「全然濡れないね。オナニーをした事が無いのかい？」
【イングリス】「…生まれてずっと、武に人生を捧げてきましたから」
【ラーアル】「ふむ、なら仕方ないな。これを使うとするか」

そう言って、ラーアルは小瓶を取り出し、その中にあった薄桃色のネバついた液体を、私の割れ目へと注ぎ込んで来た。
そして驚くべき事に、その液体は意志を持っているかのように動き、私の割れ目の中、膣の内部へと入り込んで来たのだ。

【イングリス】「ひぎっ……!? な、中に入ってくるっ……!?」
【ラーアル】「それは僕が住む天上領で作られた特別なスライムさ。子宮に寄生し、宿主を発情させ、避妊させる効果がある」

【イングリス】「子宮に寄生するスライムッッ……!? ああっ……!!」
【ラーアル】「天上領では娼館に売られた奴隷に対して使っている。どうだい？ 性奴隷と同じ体に成り下がった気分は」
得体の知れないスライムを流し込まれ、性奴隷扱いされてしまった。
私は思わずキレそうになるが、それよりもこれを取り出す事が先だ。
私はスライムを指で引っ張り出そうとするが、少し千切れるだけで、
スライムの大半は私の指をすり抜け、胎内へと入り込んでしまった。

【イングリス】「うぐっ…？　こ、この感覚は…？　あああっ…」
スライムは私の膣深く、すでに指では取り出せない位置に入り込んでいた。
しかし意外にも不快ではなく、ひんやりとした心地よさがあるのだ。
それが私が生まれ変わって初めて感じた、女性としての性的快楽だった。
【ラーアル】「ククク…こんな下等生物相手に、ずいぶん気持ち良さそうじゃないか」
【イングリス】「くっ…誰がっ！　こんな汚らしいモノ…早く外に出しっ…ひっっ……！！」
【ラーアル】「残念だが、このスライムに寄生されたが最後、二度と取り出す事は出来ないよ」

スライムは、すでにその半分以上を私の子宮内部へと潜り込ませていた。
私はこの身に宿る神騎士としての力、エーテルの力を使う事は出来るが、あくまで戦闘に使う事しか出来ない。
子宮内部のスライムだけを取り出す、という器用な事が出来る力ではない。
それを行えば、恐らく私の下半身もろとも吹き飛ばしてしまうだろう。

私は、取り返しが付かなくなった事への絶望を感じていた。
しかしその絶望は、すぐに別の感覚によって塗り替えられて行った。

【イングリス】「つ…!? あっ…!?」
どうやらスライムが完全に子宮に入り込み、子宮内に薄く広がって張り付いたようだ。その瞬間、この体に生まれてから初めての、強烈な性的衝動が私に襲い掛かって来た。この衝動は、男だった時のそれに匹敵する。私を取り囲む美女を犯し、中出ししたい、種付けしたいという、耐えがたい性的衝動。
しかし、今の体に起こる性的衝動は、犯され中出しされたいという、メスの衝動だ。こんな奴に、こんな形で、自分がメスである事を自覚させられるなんて。しかし、そんな屈辱よりも、今の私はこの性的衝動の方で頭がいっぱいだった。

【ラーアル】「ククク…その衝動を抑える方法は一つだけ。僕のコレをねじ込んで中出しする事だけさ」
【イングリス】「はぁつ…はぁつ…。うぁぁつ…!!」
ラーアルはそう言って、服を脱ぎ勃起したペニスを見せつけた。
前世で男だった頃、自分の肉体で散々見慣れていたはずなのに、
メスの体で発情している今は、特別なモノに見えてしまう。
早くそれで犯され、処女を奪われ、精液を注ぎ込まれたい。
私の心と体は興奮し、さらに性的衝動を強くしていく。
しかし、こんな卑怯な男に処女を捧げるなんて、私のプライドが許さない。
私は本能と理性の間で葛藤し、愛液を滴らせながら必死に抵抗していた。

【ラーアル】「ほら、何をしている？　君はビルフォード公爵家を守るために夜伽に来たのだろう？」
【イングリス】「うっ…あっ…」
そうだ、私がすべき事は、自分のプライドを守る事ではない。
私はビルフォード公爵家を、ラニを守るためにここに来たのだ。
だからこれからする事は、私が性的衝動に駆られたからではない。
あくまで、大切な人達を守るため、仕方なくやる事なのだ。
そんな大義名分を得た私は、理性で抵抗する事を捨て、ラーアルを押し倒した。

【イングリス】『いぎっ…！　あがあああっ――――』
挿入の瞬間、処女膜を引き裂く痛みが私の身を貫いた。
だが、この程度の痛みに耐えられない私ではない。
むしろ、体の痛みより、本当にこんな男に処女を捧げて
しまったという事実が、私の心を黒く塗りつぶす。
しかし、それ以上に私がショックを受けていた事は、
痛みと絶望の中に、メスの快楽が存在している事だった。

【ラーアル】「ふっ…くっくっく…！　やったぞ！　ついにあのイングリスを…！！」
私の処女を貫いたラーアルは、愉悦の笑みを浮かべていた。
私は男だった頃の自分を、無意識にラーアルに重ねてしまう。
ラーアルの、男としての気持ちはとても良く理解できた。
自分で言うのもなんだが、こんなに美しい娘が貞操を捧げ、
自分の腰の上で喘いでいるのだ。さぞ気持ちがいい事だろう。
私は、そんなラーアルが少し羨ましいとさえ思ってしまった。

【イングリス】「んぐっ…ひっ！　あああっ！！」
【ラーアル】「さ、流石にすごい締め付けだなっ…」
しかし、そんな私の心など知らぬと言わんばかりに、男を求めている私の膣は、ラーアルのペニスをぎゅうぎゅうと締め付け、快楽を絞り出そうとする。膣内に肉棒が突き刺さっている強烈な異物感。しかし、その異物感がとんでもなく気持ちいい。
私が男だった頃、私と交わった女性達も、同じ感覚を味わっていたのだろうか。私は私と交わった女性達の動きを思い出してを真似し、ゆっくりと腰を動かしていく。

【ラーアル】「くくっ…そんなにも僕のペニスが気持ちいいのかい？ほらほら、その調子で動いて、僕に奉仕するんだ…！」
【イングリス】「ぐっ…ひいっ…！」
ラーアルにそう言われると悔しいが、図星であり何も言えない。
勿論、この快楽はスライムによる発情のためではあろうが、
正直言って、こんなにも気持ちいいなんて思ってもいなかった。
私は無我夢中で腰を動かし、気持ちのいい場所を探っていく。

【イングリス】「あっ！　ひっ…！　んんっっっ！！」

ここがGスポットで、ここがポルチオか。
前世で初めて女性と交わった時、
そうやって教えてもらった事を思い出す。
あの時教えてもらった事を、女に転生して
自分の身で経験する事になるなんて。
私は相手がラーアルである事も忘れ、
ひたすらそのペニスを味わった。

【ラーアル】「くっ…！　名器すぎるっ…！　も、もう我慢できない…！」
しかし、元英雄王だった私と違い、ラーアルはただの一般人だ。
ラーアルは私に付いてくる事が出来ず、腰を小刻みに震わせていた。
本人が言う通り、もう射精が近いのだろう。
本来ならこんな男の精液を注がれるなど、絶対に耐えられない事だ。
しかし今の私は、1秒でも長くペニスを味わいたいと考えている。
いくら射精が近いからと、それを引き抜くなんてありえない。
私は膣を強く締め付け、ペニスが抜け落ちないように深く咥え込む。
その瞬間、ラーアルは我慢しきれず、私の中で射精した。

びゅるっ…！ どびゅるるるるるっっっ！！！
『イングリス』『ひぎっ！？ あああああっっっ！！』
そして射精と同時に、私に予想外の快楽が叩きつけられた。
本来なら、こんな男の射精など、気持ち悪いに決まっている。
しかし、そんな汚らしい男の精液が膣内を満たし、
子宮に流れ込む感覚が、異様なほどに気持ちいい。
これもスライムのせいなのか、それともメスの体の本能なのか。
私はあまりの気持ち良さに絶頂し、自分の声とは思えない妖艶な喘ぎを漏らした。